

いたいのいたいの 飛んでけ通信

Since 1991～活動歴28年。通称ガラガラドン。新宿区の国立国際医療研究センター・東京女子医大など高度医療の病院近くにハウスグランマを構え、入院中から退院後までトータルな子育て支援を実施。付き添い家族のための「お母さん食堂」は毎週土曜に開店

夏祭りに参加して



大きなシャボン玉に子どもたちからどどどと歓声が...

2019年8月30日(金) ボランティア10人 遊んだ子ども8人

- ★準備中にまだかな～と覗きにくるお子さんもいてワクワクの夏祭りのスタートとなりました。うちわ作りでは、出来上がった時の笑顔が最高でした。企画して頂いた看護師さん保育士さん有難うございました。立澤
- ★始まりが待ちきれずプレイルーム前を行ったり来たりのお子さんがいて楽しいスタートでした。今年は前半に兄弟姉妹も参加できて、いつもと違って遊びながら兄弟を思いやる姿に心がフワリしました。古賀
- ★子どもたちの素敵な表情がたくさん見え、看護師さんや保育士さん、ボランティアと一緒に縁日を楽しんでいる姿をみて、きっと子どもたちにとって素敵な夏の思い出になれたのではないかと感じました。徳山
- ★ボランティアは前もってプレイルームや廊下で手作りの提灯を作って飾り、雰囲気作りをしておきました。入院が長引くとなかなか会えない兄弟たちも今年は一緒で、小さな妹と寄り添うように、魚釣りをしているお兄ちゃんの姿が印象的でした。ご家族もスタッフも嬉しそうでしたが、私たちボランティアもとても楽しい時間を過ごさせてもらいました。佐藤
- ★天気は午前中、雨。夏まつりは雨の中やるのか...と書いていたら上がったので、すごいなと思いました。坂上さんが大きなシャボン玉、去年にはないアイテムを用意してくださいました。それがドンピシャリ！大きなシャボン玉はぷよぷよとしばらく宇宙遊泳した後、パッと細胞分裂するかのように小さく分かれて消えていくのでドラマチックでした。子どもたちも大はしゃぎ。終了後、看護師さんと保育士さんがあいさつにお見えになられて、お茶とお菓子を差し入れしてくださいました。心がとても温かい気持ちになりました。今泉
- ★夏祭り、だんだんバージョンアップされてきています。これまでと大きく違ってしたのは、きょうだいの参加でした。ガラガラドンがこの病院で28年もボランティアをしているのも、国立国際医療研究センターが歴代から社会とのつながりを大切に、教育や保育環境を早くから導入する意識の高い病院で、それがボランティアも継続できる理由かとあらためて思います。坂上

...事務局より...今年も応援ありがとうございました-

認定NPO法人「病気の子ども支援ネット遊びのボランティア」
坂上和子(保育士・社会福祉士)

暮れも押し迫ってきました。季節をちょっと遡って「夏祭り」の報告から。「夏祭り」は小児病棟の看護師さんたちが企画するビッグイベントです。今年は長期入院を要する子どものきょうだいも参加されました。普段きょうだいは病棟に入れないので、この日はきょうだいも一緒に楽しみはしゃぐ姿がみられ、楽しさ倍層でした。第3週リーダーの古賀さんの報告は看護師さんの依頼「お母さんを休ませてあげてください」についてご報告しました。裏面は「お母さん食堂」を利用されたママからの寄稿です。長期に入院するとどんなことが困るのか、ママの寄稿を読んで「うんうん、そうだ、そうだよね」と思いつつ、少しでも元気になるお弁当を心がけてお届けしています。退院したシュンちゃんと遊んだひとときを吉田さんが寄せて下さいました。シュンちゃんは昨年夏から約8か月入院していた坊やで、毎週2日、5人のボランティアが有償で付き添いを交代しました。この春から病院のソーシャルワーカーになった吉田さん、学生時代にこのような経験をされたことはこれからの仕事に生かされることでしょう。最後は社会貢献支援財団から頂いた「奨励賞」の報告です。12,000人の受賞者の中から選ばれた理由は「お母さん食堂がんばって」でした。食堂は、FBや口コミでも広がり、今では東京女子医大や東大にも広がりました。お弁当を通してお母さんたちの切迫した状況が見え、今では付き添いの健康を守る大切な取り組みになっています。とはいえ、お金がかかります。「子ども堂」と違って自治体から助成も得られません。けれども会員・企業・教会など大勢の方々からのご寄付、さらに今年は青い鳥財団からも事業の助成金を頂き、そうした社会の支援によって事業が無事続けられました。毎年、「来年はつぶれるかな...」と思いつつながらの綱渡り運営なので、不思議なご縁に手を合わせずにはられません。皆さまの健康とご多幸を祈りつつ、どうぞ、よいお年をお迎え下さいませ。

ご家族を休ませてあげて下さい —第3週の土曜の活動より— 活動時間(土曜)14:00~15:30

この日遊んだ子ども9人、ボランティア8人でした。今日のボランティアでは、ちょっといつもと違うことが。看護師さんから「このお部屋は、ぜひ、入って欲しいです。子どもさんが小さいので、付き添いのご家族を休ませてあげて欲しいんです」と、あと、ここも、感染症でほとんど部屋から出られない方なので、と言われました。いずれも乳児でした。「付き添いがある部屋は入らなくていい」、と言われることが多いので、珍しいことでした。坂上さんに入ってもらった部屋は3歳の子でもママとおばあちゃんが入りました。坂上さんが「お子さんが慣れてきたら3時半までボランティアが見ていますから、お食事やカフェにいらして下さっていいですよ」と伝えました。するとママだけお出かけされました。おばあちゃんは一緒に暮らしているわけではないから、私、孫に人見知りされるんですよ」と言いながら、孫がボランティアと遊ぶ様子をそばでみていて、最後に「なんて素敵なボランティアでしょう、孫の病気からよいことを学びました、どうかこのボランティアを続けてください」と手を合わせられたそうです。

そのほか、看護師さんから一人である赤ちゃんの部屋に入るように頼まれました。様子を見に行く人見知りされる心配があったので、最初は私が学生と二人ではいりました。おもちゃやアンパンマンを見せながら、ゆっくり近づき、警戒心をといたところで学生に託しました。30分ほどして、ママが息急ぎ切ってお部屋に飛び込んで来たとき、赤ちゃんがお姉さんと遊んでもらっていたので、とても感謝された報告がありました。24時間病室で寝泊まりするご家族がおられます。付き添う家族と、付き添えない家族への配慮が看護師さんの言葉から感じられます。とはいえ、感染対策にも留意しながらなので、ボランティアへの信頼がなければ、こうした言葉かけはありえません。ガラガラドン1人1人が自覚と責任をもって参加しなければならぬと改めて心に刻みました。



私たち、第3メンバーです!



感染対策をしっかりとって病室へ

今年の8月から毎週、美味しいお弁当を頂いています。食欲がなくても、不思議とお母さん食堂のお弁当は全部食べられます。自分では無い誰かが、私の為に食事を作ってくれる”ことは、私のことを大切に思ってくれる人がいる”ことだと思えます。

母になると、つい自分のことは後回しになります。病児となれば、尚更です。だから、お母さん食堂のお弁当を食べると、私自身も大切に思えると思えるのです。次男が発症したのは、生後9ヶ月。慣らし保育も終わり、仕事に復帰しようとしたゴールデンウイーク明けでした。突然、小さな命が消えそうになる恐怖に襲われました。幸い、何とか命を取り留め、そして長い闘病生活が始まりました。

3歳になった今でも入退院を繰り返しています。24時間家族の付き添いが必須な時期もありましたが、今はきょうだい達(5歳と1歳)を保育園に預けている間に面会に行きます。普段は自分で作ったお弁当を持って行きませんが、お母さん食堂の日には、お弁当を持たない分補充用の洗剤やオムツなど重い物を持って行く日にしています。

お弁当は病室まで届けてくださいます。子どもの様子を気遣いながら、私の話しを聞いてくださいます。勇気づけられたり、アイデアを頂いたりして、とても楽しい時間です。また、お弁当と一緒におかずを多めに作って持たせてくださいます。家に帰ってから、少しでもきょうだい達と過ごす時間が長く取れるようにと。

温かい心遣いが、心に染みまします。子どもが病気になる一番困ることは、何でしょうか？ 私達は、経済的に困窮しました。それまで共働きだったのが、収入が減りました。育児が明けたことから言うタイミングだったので、蓄えが充分ではありませんでした。そして、何より保険に入っていないませんでした。公費入院費は免除されますが、病児の食費、洗濯代、面会の交通費、付き添いの食費など想定以上に出費があります。その中で、削れるのは付き添いの食費です。出来るだけ安い食事を病児の様子を気遣いながら、掻き込むようにして食べます。時には、食べることを諦めることもあります。子どもが欲しいがらないように隠れて食べることもあります。安く済ませる食事は、栄養が偏ります。長く続けば続けど、食事の楽しみがなくなります。

病院は付き添いを前提に作られていないため環境整備が充分とは言えません。大部屋ともなればカーテン一枚で仕切られた狭い空間は、プライバシーがなく、共用のシャワールームでの入浴や狭く硬いベッドでの睡眠で、体調を崩してしまう方もいました。そんな中で1食200円という安価で、いろいろ豊かな季節感あふれたお弁当が届くのです。手間のかかる栗おこわのときは感激しました。こうした思いやりあるお母さん食堂がどこの病院にもあれば、付き添いの苦労は軽減されると思います。お母さんが元気で笑顔でいる方が子どもも嬉しいと思います。(11月寄稿)



主食はちらし寿司・具材は根菜たっぷり。おかずメインはイワシハンバーグ・おつゆはイワシのつみれ汁はジャーに入れて



主食は栗おこわ・イカゲソと切昆布煮・冬瓜とカニカマ和え・オクラのおひたし・きんぴらの胡麻和え・ぶどう

退院したらお外で一緒に遊ぼうね！

—入院児の付き添いから学んだこと—



写真上、新宿でごはんを食べる御苑を散歩。写真下、熱海泊旅行。

吉田 (病院ソーシャルワーカー)

シンちゃん(病児)の付き添い(有償ボランティア)に行つたのは、昨年の8月から3月までの間でした。きっかけは、当時、明治学院大学社会学部福祉学科の学生で医療福祉を学んでいて、大学の教授から声をかけていただいたからです。この活動が自分にとって大切な経験となることと、純粹に子どもが好きで応募しました。初めて会った時の印象は「なんてかわいい子なんだろう!!」というものだったので、もう来週から一緒に遊べることにワクワクしていました。病児のため発語が難しい状態でしたが、「はい」「いいえ」は、手をあげる、もしくは横に振る動作で教えてくれたので、コミュニケーションは十分にとることができました。私の付き添いは毎週金曜6時間ほどでした。始めた当初は、遠慮がちでしたが、慣れてくると、一生懸命自分の気持ちを身振りや声で伝えてくれたり、いたずらっぽい表情をするようになったり、少しずつお互いのことがわかるようになってきました。さらに、言葉が出るようになってからは、それまで読んでいた絵本のキャラクターをすらすら読み上げたり、私の名前を呼んでくれるようになったり、「一緒に遊ぼう」と話すようになったり、闘病中でも成長を感じられました。

他方で、小児病棟で過酷な治療を続けながら、24時間子どもに付き添う家族の負担は計り知れないとも感じました。それまで市中病院しか関わりがなかった私には、24時間付き添いを求められる状況に、衝撃を受けました。そんな状況に一石を投じたのが、坂上さんをはじめとする遊びのボランティアや、お母さん食堂かと思えます。医療者だけの病院は一見すると閉鎖的環境であり、一般市民にとっても中が見えにくいため、こうした状況を知る機会もなく、関心が寄せられていないように感じます。シンちゃんは今年の春に退院して、9月と11月に再会し、ご飯を食べたり、お出掛けをしました。病室で「退院したらお外で一緒に遊ぼうね」と約束したことが実現したのです。シンちゃんのご家族、ご一緒したボランティアさんと出会えたこと、そしてそれをきっかけに病児の子どもに付き添いの意義を考えるきっかけをいただいたことに心より感謝しています。

12,000人の中から選ばれた社会貢献“奨励賞”



今年11月、日比谷の帝国ホテルで社会貢献支援財団による「社会貢献者表彰式典」があり、奨励賞を頂きました。

会場は超一流のホテルです。受賞者は地道にコツコツと社会に貢献していらした方々で地味な日々、まぶしいほどの光があたり、一生忘れられないよい思い出になるでしょう。私は2010年に「社会貢献者賞」を頂きました。今回も参加しておもてなしの細部にねぎらいの達人だなあ」とつくづく感心しました。

「奨励賞」は、過去受賞された人の中からこれぞという者が選ばれて贈られるものです。今年第53回目でした。毎年40・50人の受賞者がいるということでこれまで、12000ほどの受賞者の中から、選ばれました。この賞は推薦枠ではありません。ギリギリまで知らされず、私にとっても青天の霹靂でした。あらためてすごい賞を頂いたものです。

では、何が選考委員たちの目にとまったのでしょうか？それは28年の活動歴とともに、お母さん食堂」が評価されたのです。

「お母さん食堂」は病児に付き添うお母さんたちのための食堂です。病院近くのNPOの事務所(ハウスグラマ)を食堂に提供しています。病室から出れない方にはお弁当を病室までお届けしています。2年前から始めた事業で、今は3つの病院(国立国際医療研究センター、東京女子医科大学東大病院)に広がっています。

昨年1年間の開店は80回、利用者は延べ200人でした。食堂は家族から頼まれて始めたわけではなく、30キロの米が届いた年があり、それが2袋も。だったらおにぎりにして病院のお母さんたちに届けようと思ったのがきっかけです。始める前は、毎日のごはんのことまで心配しても、きりがなしいと思っていました。でも、はじめてみて、わかりました。上記のTさんのように自分の食事のことなどかまっていられないお母さんたち、余裕のない気持ちで子どもを看病にあたっているということ、自分が美味しいものを食べたいと思う余裕もないのでしょうか。けれども心をこめたお食事は、私自身も大切にしてみたいです。さらに「付き添いの苦労が軽減される」という言葉から心身の健康を守る大事な取り組みであるということに、可能な限り、野菜や煮物を入れ料金も200円程度に抑えているので大赤字ですが、不足分は寄付をあててきました。こうした取り組みが周知されることで、全国の子どものいる病院にも広がることを願っています。

応援ありがとうございます。

事務局 病気の子ども支援ネット
遊びのボランティア
162-0056 新宿区若松町10-1
YSビル302
Tel&fax 03-6380-3115
e-mail a.so.vo@y3.dion.ne.jp
ホームページ: <http://www.hospitalasobivol.jp>

銀行口座: 三井住友銀行深川支店 普通 3790894
郵便貯金口座: 記号10040 番号97720491
口座名: 病気の子ども支援ネット 遊びのボランティア